

「自律」と「共生」に向けた4年間の取り組み

見世直樹（鳥取県南部町立南部中学校）

キーワード：協同学習、地域協働、学校組織マネジメント

1. はじめに

本校がある南部町は、鳥取県西部に位置し、島根県と県境を接する人口約11,300人の町である。生徒数105人、通常学級5、特別支援学級2、計7学級の小規模校である。

平成24年よりめざす生徒像を「自律と共生」として「グランドデザイン」を作成し、「学校組織マネジメント」、「協同学習」の理念を取り入れると共に、地域と共に歩む学校づくり（「コミュニティ・スクール」（H21より指定）以下CS）を進めている。

2. 当時の現状（H23）

素直な生徒が多い中、学年による学力格差が大きく、自尊感情の低い生徒も多く、小学校からの固定した人間関係の中、生徒間のつながりが弱かった。

また、校内研はあったものの実質的に機能しておらず、研究授業も1年間なされていなかった。それまで行われていた生徒アンケートでは、各教科に対する理解度や集中度を聞いており、生徒に対しては「教科によって違って当たり前」、教師にとっては「教科担当者に責任有り」の文化ができていたように思った。

3. 導入期（H24）

「グランドデザイン」の作成により、目指す学校像、目指す生徒像等が教職員で共通理解されるようになった。そして、年度の取り組みの重点である「挨拶・時間・汗（直向き）」の3本柱を支える「関わり合い」の基本理念として協同学習を導入することになった。

このデザインは地域の応援団（CS）にもわかりやすく、重点事項に対し具体的な手立てが打てるようになった。生徒が地域の人と共に学校の窓に簾をつける作業は、地域協働の新たなスタートになり、その後、自己有用感を高める活動（ふれあいデー）に繋がっていった。

一方、理念は「まだ分からない。」と言う教職員が多く、他校の研修やワークショップに参加した者を中心に、校内研修や授業の見合いを進め、年二回の校内研究授業を実施した。

4. 転換期（H25）

協同学習が軌道に乗り始めた頃、当時の2年生の授業に苦戦する先生が出てきた。教科によって集中力がない、聞く姿勢が良くないと言うことで急遽学年教科会がもたれ、全ての授業で共通実践することを確認すると共に、それを生徒に投げかけ、生徒達自身でクラスの学習態度の目標を決めることになった。

生徒主体の授業にするには理念を持った教師が一方的に進めるのではなく、生徒も協同学習の良さを理解し、授業づくりに目標を持って参加することの大切さに、身をもって気

づかされたわけである。

また、先輩の学び合いの良さを学習面でも受け継ぐため、縦割り教科学習（チャレンジタイム）を行うことにより、後輩へより良い学習の雰囲気伝えていけることになった。

学校評価アンケートには、これまでも協同学習の理念を基にした目指す生徒の姿を項目として挙げていたが、この中から幾つかを小学校とも共通目標にしていくことになった。

また、このアンケート結果は、担任・学年団・学校で分析・一手を出し、CSとも意見交流をする事により、地域の応援も受けることができた。

5. 発展期（H26）

この年の卒業生の3年間の伸びは小中連携の研修会で報告すると共に、実際に小学校の先生方に授業を見てもらう度に、生徒の成長を喜んで頂くだけでなく、協同学習の良さを生徒の姿として実感して頂けることとなった。

そして、小学校の授業づくりにも中学校の考え方を取り入れられるよう、授業づくりのスタンダード作成に至った。

また、この年は学習面のみならず、体育面、文化面でも、様々な生徒が自己の可能性を発揮し、結果を残していった。色々な分野で自分を出し始めた3年生は、体育祭の応援合戦においてもリーダーを務め、これまでの踊りを改革し、チームが高まり合う姿を見せてくれた。生徒（学級目標）もPDCAを回し、教職員も様々なそれを回すことで、現時点の良い面、足りない面が分かり、具体的一手を打つ文化ができてきた。その一手も小学校と共通実践の方向を向き始めた。

6. 土台を支えた信頼関係づくり

この3年生の3年間の伸びは、ただ単に協同学習を取り入れたから、様々な人が協働できたからのみではなかった。

担任の思い、それを支える学年団、それを理解した教職員集団があった。担任は、こうなって欲しいと言う姿を、語り続け、通信に書き、教師自ら動いてみせることも多々あった。どんな小さな事でも「ありがとう」を生徒に伝えていた。3年団を中心に教員同士もお互いをフォローしたり、認め合ったりする姿を生徒に見せ、大人として仕事人として、尊敬し合っていることを生徒の目の前で伝え続けた。まず、教員同士が思い・考えを重ね合い、尊敬し合う事が生徒との信頼関係づくりに大切なことを我々も学んだ。

7. 今後の展望

この4年間の取り組みの中で、生徒は自分の力を発揮し始め、自信も少しずつつけていった。これは学校内外で様々な形の「協働（協同）」ができあがっていく過程でもあった。協同学習には教師集団の思いの出し合いがまず大切である。9年間で子どもを育てようと思えば小学校の先生との擦り合わせも今後ますます重要になってくる。時間的にも物理的にも制約がある中、いかに負担感なく能率的に年度初めのスタートが切れるようにするか、また、その後の語り合いを継続していけるか、今後も模索が続くと思う。